

探究フィールドワーク In New York

3月4日～9日の5日間で、連携協力校である長崎県立長崎東高等学校の生徒とニューヨーク探究フィールドワークにいきました。

一日目

まずこの日は、ガイドさんと共に「リトルイタリー」を訪れました。



リトルイタリー

ここは、19世紀後半から20世紀にかけてイタリア国内の貧困などから逃れるため、多くのイタリア移民がアメリカに渡り、コミュニティを形成した場所です。

現在も、イタリア料理店やイタリア国旗が見受けられ、イタリア移民の歴史や文化を残す場所として残っています。

次にテネメント・ミュージアムを訪れました。



ここは、19世紀から20世紀初頭にかけて実際に移民に使われていた集合住宅が博物館として残されている場所です。

私たちは、ジャガイモ飢饉が原因で移民としてアメリカに居住していた『アイルランド人』についてツアーを通して学びました。実際に移民が生活していた場所で説明を受けることで、当時のアイルランド人の生活や環境を知ることができ、移民の扱われ方やその苦勞を深く理解することができました。

午後からは、9.11メモリアルミュージアムを訪れました。



展示の様子



モニュメントにて学習する様子

私は、特にこのミュージアムの映像資料や遺族からの故人のお話が印象的に感じました。カラーの映像により、当時の人々の表情や状況が鮮明に記録されていました。また、遺族が語る故人の生前の性格や生活を音声で自由に聞くことができる展示が設置されていました。この展示を通して、多様な方々が亡くなられたという規模の大きさと、“実際に起きた出来事である”そして“この出来事が起きる前は人々は普段通りに生活していた”ということ強く実感することになりました。

それと同時に原爆資料館の展示と比べて身近に感じる瞬間が多いとも感じました。このことから、被曝の記憶を語るができる人が少なくなり、過去のこととして捉えられつつある原爆投下の展示においても、現在の技術を用いることで人々の心に残り、長く継承される展示を私たちの世代が考えていく必要があると考えました。

ミュージアムを見学したあとは、同時多発テロで破壊されたワールドトレードセンターの跡地を訪れました。その場所はプールと呼ばれるモニュメントとなっており、周りには亡くなった犠牲者たちの名前が刻まれていました。

二日目

ニューヨーク国連本部を訪問しました。ツアーに参加し施設の見学をしたり、国連の核軍縮部の方々と対談をさせていただきました。ツアーでは、安全保障理事会や、総会を行う会議室、世界にどれだけの核が存在しているか、数字で可視化しリアルタイムで確認できるスペースなどを見学しました。



国連総会の会議室にて



核兵器の数の数値化したもの

国連の方々との対談では、「平和宣言文」、「模擬国連」、長崎東高校さんの探究プロジェクトで行われた、「戦前の写真をカラー化した写真集」の三つについて発表しました。また、国連の方々からは、私たちが事前に質問していたものに対して、レクチャーをしていただき、「平和」についてより考えを深めることができました。



国連の方々との対談の様子



核軍縮部の方々との記念撮影

午後からは、長年国連の図書管理をされていた佐藤純子さんと、国連の合唱団で活動をされているポーラさんにお話を聞くことができました。

国連の職場環境が良いことや、佐藤さんの就職するまでのキャリアなど、普通は聞くことができないような、貴重なお話をさせていただきました。

ヒロシマやナガサキの子供たちは、戦前の町や人の当たり前にあった日常の写真や、被爆者の方からのお話を直接聞くことができるため、戦争の悲惨さや、被爆者の思いについて、身近にそして、直接的に感じることができます。ヨーロッパでもヒロシマとナガサキの原爆をもとに平和学習が行われているそうです。

しかし、他国の子供たちは、原爆投下直後の町の白黒写真などしか見ることができないため、原爆について学習するうえで、結局何が大切で、何が恐ろしいのか、私たちのように直接的に理解することが難しいのが現状です。

私たちは、世界中の子供たちにとって「平和」とは何なのかを考え、ヒロシマとナガサキの原爆について世界にダイレクトに届けられるよう、これから活動していきたいと考えました。

三日目

自由の女神を見に行きました。そこで、自由の女神が誕生するまでの歴史を学びました。とても立派で、当時の移民に希望を与えたのではないかと思います。



自由の女神の実際の足のサイズ

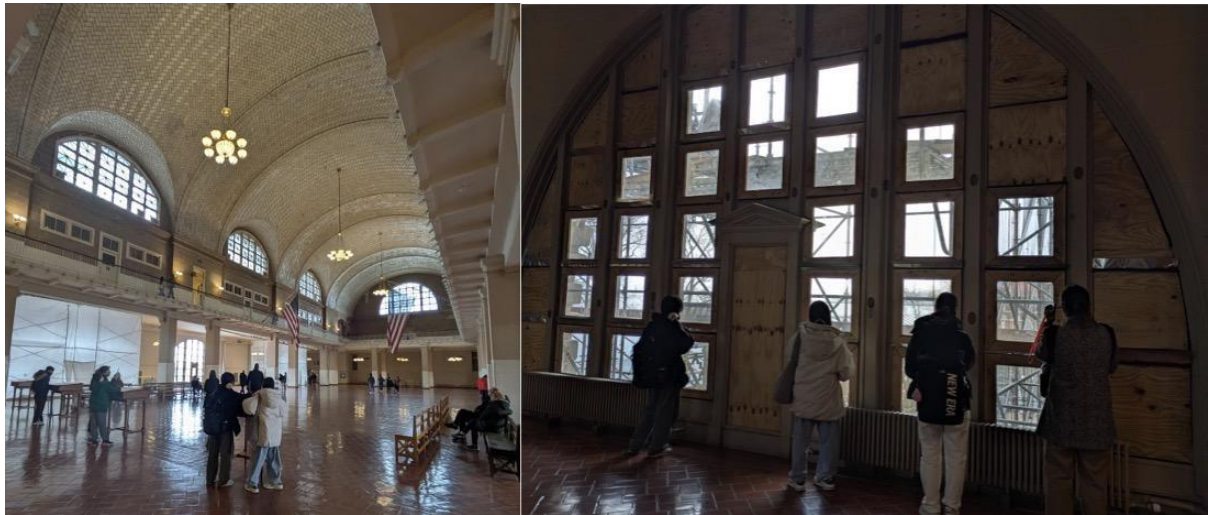
自由の女神のデザイン案

その後、移民博物館に移動し当時の移民が実際にどんな思いで来たのか学びました。移民博物館を見始める前に、自分が移民ならどうするか、移民は自身のアイデンティティを保つことはできるのか、現在とのつながりを見てきてほしいと先生の方から話がありました。

それを意識してみると感じるものが様々ありました。

エリス島についてとしても安心することはできません。

当時は、移民博物館内の知らない言語や騒音に恐れ泣いている人もおり、誰もが希望を持っているわけではありませんでした。



移民が選別された場所

窓から見える病院を見ている様子

音声ガイドの指示に従って移民博物館の窓から見える病院をみんなで見つめました。病院では病気にかかってしまったり、何かしらの異常があった患者がそれまで一緒に移動してきた家族と離れ、収容されます。もし自分がその一人だとしたら、希望を持つことはできなかったと思います。

本当にそれほどの大変な思いをしてアメリカに来ることには価値があったのでしょうか。

移民としてきていた人々は自国内で、飢饉が起きたり、特定の民族に対する暴力などが行われていました。

それらはかなり深刻で、死ぬか生きるかの思いでアメリカに来たのだと思います。実際に働いたとしても給料はほんの少力で自身が信仰している宗教など、自分のアイデンティティを気にする余裕もなかったのかもしれない。

排除を形作っているものは何なのか、色々な疑問が浮かんできて、自分なりの答えを考える良い機会になりました。



ニューヨーク証券取引場

ブルックリン橋

移民博物館を出た後、ウォール街やブルックリン橋に行きました。ブルックリン橋は移民が作った橋なので、移民博物館を見る前と後では見え方が異なりました。

最後に経済の中心ともいえるタイムズスクエアに行きました。そこからアメリカの経済や多様性について感じました。

そして三日間の考えをまとめてお互いに意見を交換し合い、この研修は終わりました。

三日間を振り返って

アメリカは現在、「自由の国」として広く認識されていますが、その歴史の中で、移民は一度排除をされ、差別の対象となっていました。それでも、その移民たちがいたからこそ、今のアメリカがあり、国の多様性と力強さにつながっています。このことを研修で実際に背景となる場所を訪れる中でより実感できました。

今回の研修では多様性と排除をテーマに、挑みました。それぞれの場所で目的と問いを持って活動することで、感じるものは全く異なります。物事を多面的に考え、自分の意見をもつきっかけになり、一瞬一瞬が学びと気づきの連続でした。これらの経験から、感じたことと得たものはとても貴重なものでした。

今後の活動では、研修で得た「問いへの向き合い方」や「ものごとの見方」を自分のものにし、これからの社会をつくっていく一人の人間という自覚をもち、社会に貢献していきます。